

花といえば、日本では古来より梅の花のことをあらわしていたようですが、現在では、花といえば桜の花を思い浮かべる人が多いのではないのでしょうか。ニュースでは桜前線が取り上げられ、桜の花の咲き誇る姿や散っていくさまは春の風物詩となっています。

仏教はインドでうまれました。修行者は主に屋外で修行をしたため、自然と一体になって修行をしていました。

仏教には、お釈迦さまを讃える三つの大切な日があります。

四月八日は、お釈迦さまの誕生日、降誕会。「花まつり」ともいいます。

十二月八日はお釈迦さまがお覚りを開いた日、成道会。

二月の十五日はお釈迦さまの亡くなられた日、涅槃会です。

それぞれのお話には特有の樹木がでてきます。

お釈迦さまの誕生日である降誕会にちなむ樹は、お釈迦さまご誕生の際、お母さまが手をのばされた樹で、「無憂樹」といいます。「無憂」とは、憂いを感じないという意味で、その花は鮮やかなオレンジ色です。

成道会にちなむ樹は「インド菩提樹」で、ハート型の葉っぱが特徴です。もとは「ピッパラ樹」という名前でしたが、お釈迦さまがおさとりを開いた際にこの樹の下で坐禅をしていたということから、おさとりという意味の「菩提」の樹、「菩提樹」といわれるようになりました。

涅槃会にちなむ樹は、「沙羅樹」です。お釈迦さまが亡くなられた際に咲いていたとされています。小さな白い花をたくさんつける樹で、『平家物語』の冒頭に、～祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらわす～とあるように、その白い花が散るさまは、無常をあらわしているかのようです。

このように、お釈迦さまをはじめとする修行者は、さまざまな自然の織りなす景色とともに生活をしていたのです。

お釈迦さまが示されたことばに、

「うるわしく、あでやかに咲く花で、しかも香りのあるものがあるように、善く説かれたことはも、それを^{じっごう}実行する人には、^{みの}実りがある。」という教えがあります。

人の善い行いや言葉は、花の香りのようにそこはかたなく^{ただよ}漂って多くの人に届き、その影響力を受け同じように行う人は、善い結果をもたらすということです。

^{しきおりおり}四季折々の中で、自然を大切にする感受性を持ち、善い行いをする人になれるように精進したいものです。

— 終 —